

研究主題「実践的コミュニケーション能力を高める指導方法の工夫

A L Tとの授業に生かすための英語教員単独の授業の工夫に着目して」

東京都教職員研修センター 研修部 現職研修課
三鷹市立第三中学校 教諭 藤田 香苗

研究のねらい

平成15年3月「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」が示され、実践的コミュニケーション能力の向上を目指した指導の改善が求められている。これまで、生徒の実践的コミュニケーション能力を高めるには、英語を用いてコミュニケーションを行う必然性のある場となるA L T（外国語指導助手）との授業での活動が有効であると考えられ、その授業での指導方法の工夫に着目されることが多かった。しかし、実際には、A L Tとのコミュニケーションの機会を得ても、そのための言語材料や表現の定着がなければ、十分なコミュニケーション活動を行うことができず、A L Tとの授業を効果的に実施することができない。生徒の実践的コミュニケーション能力を高めるためには、A L Tとの授業におけるコミュニケーション活動をただ充実させるだけでなく、それ以前のJ T E（日本人英語教員）が普段単独で行っている授業を理解・定着の場とし、A L Tとの授業がその定着を生かす実践の場としてつながっていくような授業の関連性が重要であると考えた。そこで、A L Tとの授業に生かすJ T E単独の授業の工夫に着目し、その関連性を意識した指導事例を作成することとした。

研究の内容と方法

1 先行研究

英語の指導方法にかかわる文献の分析から、生徒の実践的コミュニケーション能力を高める指導には、「言語活動」から、その言語材料を生かした「タスク活動」を与え、「実践的コミュニケーション活動」へとつなげる段階が重要であることがわかった(高橋 2001)。これまでの「実践的コミュニケーション能力を高める指導」の研究の多くは、実践の場となるA L Tとの授業をどのように効果的に行うか、という点に着目して、授業の検証や分析を行っているものが多かった。しかし、それ以前の「言語活動」や「タスク活動」など「実践的コミュニケーション活動」に向けての理解・定着の必要性についての研究は十分には行なわれていない。

2 授業観察

都内中学校で行われているA L Tとの授業を観察し、J T E単独の授業との関連性について着目し、次のような知見を得た。

- (1) A L Tとの授業は、既習の言語材料を意識して行うことが重要である。ただし、その言語材料を用いた表現の仕方や活動の仕方が、事前に十分定着していないと、生徒が実際にA L Tとの授業の場で表現しようとしても、戸惑い、スムーズにコミュニケーション活動を行うことができないことが多い。J T E単独の授業で表現の仕方や活動の仕方を定着させ、日常的にコミュニケーション活動に慣れさせることが、A L Tとのコミュニケーション活動を円滑にする。
- (2) 自然な英語にふれる機会を増やすため、生徒とA L Tとのコミュニケーション活動を多くすることが有効である。しかし、普段慣れない英語にふれることは、生徒に大きな不安を与えるので、生徒の実態を十分に把握しているJ T Eが、しっかりとした授業計画をもって、授業をリードしていくことが必要である。

(3) 普段の授業から、JTE自ら英語を積極的に用いたり、ALTも生徒を不安にさせない表現の仕方を心がけるなど、英語で話しやすい環境を作ることが大切である。生徒が間違いを気にせず、「英語を用いて話してみたい」と自然に英語によるコミュニケーション活動が生まれるような環境作りのための工夫は、JTEとALTのどちらにも必要である。

3 生徒の質問紙調査の実施

生徒の「英語の授業に対する意識」などについて質問紙による調査を行った。調査を9月（検証授業約1か月前）に、調査を10月（検証授業時）に行った。どちらもALTとの授業の前後に調査を行い、調査と調査の結果の比較から検証授業の効果を分析した。

4 指導案作成・検証授業

(1) 検証授業のねらい

実践的コミュニケーション能力を高めるためには、生徒が実際に英語を使ってコミュニケーション活動を行う実践の場として、ALTとの授業が位置付けられることが効果的であるが、そのためには、ALTとの授業での活動を充実させるだけでなく、それ以前の、JTE単独の授業での言語材料や表現の定着が不可欠である。そこで、2週間に1度、ALTが来校するという設定で、JTE単独の授業とALTとの授業内容に関連性をもたせた学習指導案を作成して検証授業を行い、次の2点についての検証を行った。

JTE単独の授業とALTとの授業での指導内容に関連性をもたせることで、ALTとの授業において生徒のコミュニケーション活動に対する達成感が高まること。

達成感を得られたことで、JTE単独の授業の取り組みに対しても意欲が高まっていくこと。

(2) 検証授業の内容

時間	授業のねらい	学習活動
1	コミュニケーション活動を行う言語材料の導入	・教科書を活用した、言語材料の導入。 ・生徒自身に言語材料の用いられ方に気付かせる。
2	コミュニケーション活動に用いる言語材料の定着	・日本語も用いて言語材料の基礎を理解させる。 ・視聴覚教材を有効に活用した、発音の定着。
3	既習の言語材料を用いた表現の練習	・生徒の実態にあわせ、自分の考えや気持ちを、適切に表現する方法を学び、表現への関心を高める。
4	実践の場での表現に向けての練習	・実践の場で、十分に自分の気持ちや考えを伝えられるよう、表現方法についての指導をおこなう。
5	実践的コミュニケーション能力育成のための活動	・英語を用いる必然性のある場を設定し、生徒に自分の考えや気持ちを自由に表現させる。
6	コミュニケーション活動のまとめと新しい言語材料の導入	・ALTとの授業における活動内容を平易な英語で確認し、表現方法についてのさらなる定着を図る。

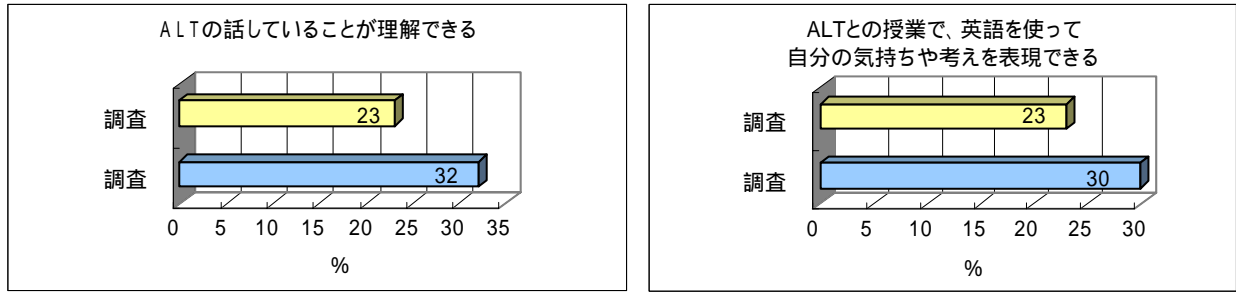
研究結果と考察

1 検証授業の結果と考察

(1) ALTとの授業でのコミュニケーション活動への達成感の変化

検証授業を行う前の授業での調査とJTE単独の授業とALTとの授業の関連性を意識して行った検証授業での調査におけるALTとの授業後の生徒の「英語の理解度や表現力」を比較した。その結果、関連性をもたせることで、ALTの話を理解したり、自分の考えや気持ちを表現するコミュニケーション活動への達成感が増すという成果が得られた。（図1）

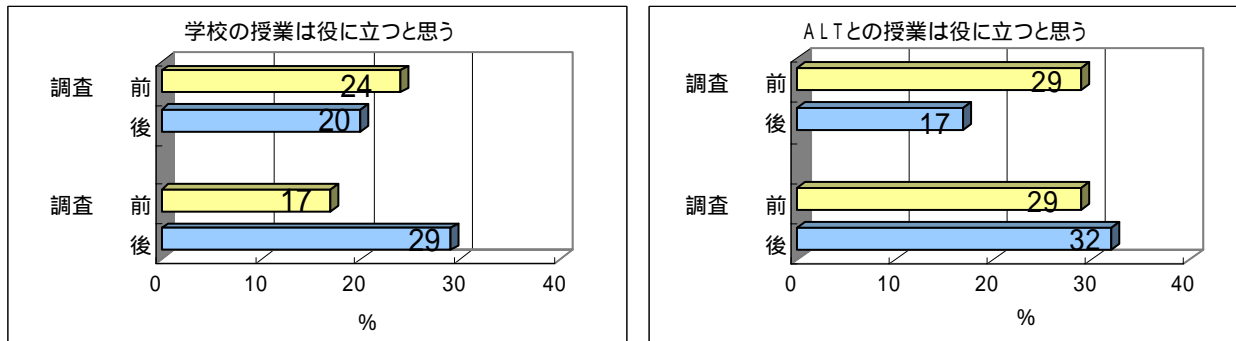
図1 調査前と調査後における「ALTとの授業後」の比較



(2) 学校の英語の授業に対する意識の変化

ALTとの授業の前後で、学校の授業やALTとの授業に対する意識の変化について比較したところ、関連性を意識した授業では、授業後に、「英語を話す力を身に付けるために、学校やALTとの授業が役に立つ」と感じる生徒が増えるという結果を得た。(図2)

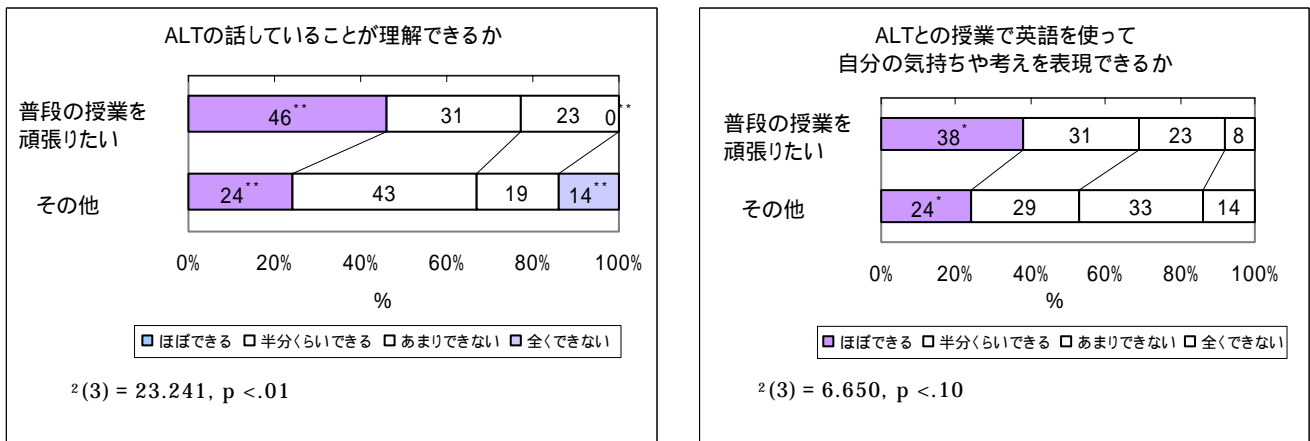
図2 調査前と調査後における、ALTとの授業の前後の比較



(3) 「コミュニケーション活動の達成感」と「JTE単独の授業に対する意欲」の関連性

「自分の考えや気持ちを英語で伝えることができるようになるために、これからどんな事を頑張って取り組みたいと思うか」という問いに、「普段の授業を頑張りたい」と答えた生徒が、検証授業後の調査で 31% 増加した。そこで、「普段の授業を頑張りたい」という意欲と「英語の理解度や表現力」にどのような関連性があるかをみるため、「普段の授業を頑張りたいと答えた生徒」と「他の回答を選んだ生徒」の質問紙調査における回答を比較した。その結果、「普段の授業を頑張りたい」と答えた生徒の方が、ALTの話を理解できたり、英語を使って表現できたと感じている傾向が高いことがわかった。(図3)

図3 検証授業のALTとの授業後にJTEが普段単独で行う授業への意欲が増した生徒とそれ以外の生徒の比較



図中のマークは残差分析の結果 *p<.05 **p<.01

以上の結果から、次の2点について検証することができた。

J T E単独の授業で、十分な表現の定着を行い、その定着を、A L Tとの授業での実践の場へつなげていく事で、生徒の理解度や表現力が増し、コミュニケーション活動への達成感がより得られること。

A L Tとの授業で十分なコミュニケーション活動ができた達成感から、J T E単独の授業での定着の大切さを理解し、そのことにより、J T E単独の授業で、より多くの表現を学びたいという意欲が増していくこと。

2 J T EとA L Tとの特性についての分析

検証授業の結果と考察から、「J T E単独の授業」と「A L Tとの授業」におけるそれぞれの長所と短所を分析し、その結果から、実践的コミュニケーション能力を高めるための効果的な指導方法について、次のような考察を行った。

	J T E単独の授業	A L Tとの授業
実践的 授業 形態 の コミュニケーション 能力 育成 の ための	毎時間の定着により、英語で話したり聞くことに慣れさせ、「英語によるコミュニケーションへの姿勢作り」をする。	実際のコミュニケーションの場で慌てないよう、英語使用者による自然な英語を聞き取り、反応できる力をつける。
	自分の考えや気持ちを表現できるようになるための「言語材料」「表現の仕方」「発音」などを理解・定着させる。	英語使用者に対して自分の考えや気持ちを実際に表現できたことへの達成感をもたせる。
	学んだ言語材料をもとに、実践の場で使う自信をもたせるためのコミュニケーション活動を経験させる。	定着したことを実践の場で活用させ、英語を用いてコミュニケーションできたという達成感をもたせ、より多くの表現を学びたいという意欲へつなげていく。
	生徒に表現を分かりやすく理解させるための英語使用のモデルを見せる。	実際に使われている自然な表現を定着させるための英語使用のモデルを見せる。
	生徒の英語表現を聞き、正しい表現方法を指導する。 生徒の伝えたい事を十分に理解し、それにあった表現方法を指導する。	生徒の英語表現を聞き、自然な表現方法を指導する。 既習表現にこだわらずに、自然な会話で用いられる英語表現を指導する。

「実践的コミュニケーション能力を高める」には、このような特性を生かして関連性をもたせた授業を行うことが重要である。しかし、そのどちらか一方に重みがあるのではない。両者の特性を場面に応じて、意図的に組み合わせることで、それぞれの特長が効果的に発揮されるものである。

今後の課題

今回の研究の結果及びその考察から、J T Eが単独で行う授業とA L Tとの授業を、J T E、A L Tそれぞれの特性を生かし、関連性をもたせて行うことで、生徒の実践的コミュニケーション能力をいっそう高めることができ、また、その達成感から、英語の授業への生徒の意欲をさらに高めることができるということが検証できた。しかし、実際には、A L Tとの授業回数が少なく、年間での授業数が限られている学校が多くあり、年間の中での関連性のもたせ方が難しい現状がある。そのため、今後は、今回分析したJ T E、A L Tの特性を効果的に生かして関連性をもたせる年間指導計画の工夫や、その計画の中でのJ T E単独の授業の効果的な活動の開発が必要である。